　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　２０１７．１１．１８　大草

論文ドラフト　仏教

第○章　日本人の倫理意識（コンプライアンス意識）への仏教の影響

目次

１．はじめに

２．仏教の戒律

　２．１五戒

　２．２十重禁戒

３．正法

４．経典

５．因果応報の思想

６．輪廻転生の思想

７．まとめ

１．はじめに

仏教は、日本人の日常生活に大きな影響を及ぼしてきている。仏教は、倫理性を含まず、ひたすら極楽浄土に導くための救いの宗教と言われることもある。仏教学者によると仏教には一般的に倫理性は含まれていないとされているが、倫理性も含まれているとする学者もいる（注１）。

　本稿では、第一に仏教に倫理性が含まれており、仏教のどのような倫理が現代日本人の倫理意識に影響を与えているのかを明らかにしたい。次に仏教における因果応報の思想と輪廻転生の思想を紹介し、それらが現代日本人の倫理意識にどのような影響を与えているのかを明らかにしたい。以上の２つの観点から仏教を取り上げる。

２．仏教の戒律

　仏教には、五戒、十重禁戒、正法・八正道など釈迦の教えとして守るべき規律がある。

それらの規律は戒律と呼ばれ、その内容を検討すれば倫理性とは無関係ということはできず、むしろ僧侶と一般信者の双方が守らなければならない倫理的な規律であると考えられる。戒律は、僧侶を対象にしているとの説もあるが、大乗仏教においては、その戒律が一般人にも適用される倫理を含んでいるといえよう。

２．１五戒

　仏教における最も根源的な戒律は五戒という戒律である。これは、基本的かつ常識的な戒律である。

２．１．１不殺生

第一は不殺生である。これは、この世のありとあらゆる生命ある存在を殺してはならないという戒律である。人間が生きて行くためには、他の生命の命を奪うことは避けられない。生命維持のために必要な食物はとりもなおさず他の生命体を食べることになる。動物の肉でなくても野菜や穀物も生きている。これらも食べてはならないとなると何をたべればよいのか。水、牛乳、自然死した動植物なら食べても殺生にはあたらない。こう考えると非現実的な戒律であり、守ることが大変難しい戒律といえる。

２．１．２不偸盗

　これは他人の物を盗んではいけないという戒律である。基本的な倫理であり説明を要しない。

２．１．３不邪淫

　これは、僧侶に対しては異性と接してはならないとの戒律であるが、一般信者や一般人に対しては、道理の通らない異性との接触を禁じたものである。結婚に伴う異性との接触は邪淫ではないため許される。異性との接触がなければ、子孫は生まれず、人類は滅亡してしまう。この基本的な戒律は親鸞により破られる。親鸞自ら、妻帯するという戒律違反を犯している点、戒律がいかに軽んじられているかを示していると言わざるを得ない。

２．１．４不妄語

　これは、嘘をついてはならないということである。これも説明を要しない基本的な倫理である。

２．１．５不飲酒

　これは、酒を飲んではいけないという戒律である。酒を売ってはならないとの説もある。酒を好む僧も多く、戒律に背かないように酒を般若湯という湯としてとか、薬と称して飲むという形をとってきた。さらに、この戒律は正気を失うほどの大量飲酒を禁じたもので、多少の飲酒は許されるというように融通無碍に解釈されて戒律は守られてこなかった。（日本仏教において戒律がいかに軽んじられてきたかは以上を見れば明らかである。あの手この手で戒律を亡き者にして、守らなくてもよい方法をとってきている。これは、規律を守らなくてもよいとするもので、日本文化の一つの特徴といえよう。）

２．２十重禁戒

　僧侶には、上記の五戒の他にさらに五戒律が追加されており、合わせて十重禁戒（天台宗の戒律。真言宗では同様なものに十善戒がある）という。

２．２．１不悪口

　僧侶の悪口を言ってはいけないという戒律である。

２．２．２不両舌

　自分をほめて、他人を謗ってはいけないという戒律である。

２．２．３不綺語

　貪ってはならず、また物惜しみしてはいけないという戒律である。

２．２．４無瞋（むしん）

　憤ったり、怒ってはならないという戒律である。

２．２．５謗三宝

　三宝（仏・法・僧）を謗ってはならないという戒律である。

　これらを入れて男僧には２５０戒、尼僧には３４８戒がある。

　仏教には、様々な戒律があるが、日本仏教ではその戒律にあまり重きをおかないようである。戒律を厳しく守るという原理主義的な宗派もあるが、日本仏教では戒律は破られることを前提にしているような寛容さが感じられる。

３．正法

　仏教は、もともと国家と連携関係にあり、鎮護国家を旨として、正法理念による平和と繁栄をもたらすものと考えられてきた。しかし、平安時代末期には、その正法理念が重要でなくなった。末法思想が広がる一方で、仏教による個人の救済が法然等により説かれ、鎮護国家から個人救済へと仏教の質的転換がなされた（注２）。

　正法理念は、仏教の基本理念の中心となる思想であり、日本人の思考に少なからず影響を与えてきたと考えられる。

　それでは、日本人に影響を与えてきた正法理念とはどのようなものであろうか。正法とは釈尊の教えのことであり、釈尊入滅後、正しい教え（正法）が１０００年間は守られるが、その後は教えだけが残り、どのように修行しても悟りを得ることが不可能となる末法の時代に入るとされていた。その末法の開始が１０５２年とされており、これを克服することが社会より要請された。

　これに応えるものとして、戒律を守り信仰することにより涅槃（さとりと死すことの二つをさす）に至るための正しい方法=八正道が唱えられた。八正道とは、第一に正見（正しく無常を観察すること）、第二に正思惟（正しい考えを持つこと）、第三に正語（正しい言葉をもつこと）、第四に正業（正しい行いをすること）、第五に正命（正しい生活をすること）、第六に正精進（正しい努力をすること）、第七に正念（正しくとどめること）、第八に正定（正しい集中力を完成させること）である。この八項目の正道を実践すれば、無事涅槃に到達できるとされている。この八正道は現代の倫理を達成する道でもあるということができ、我々日本人の言動に少なからず影響を与えてきたものと考えられる。なお、これらの八正道そのものが倫理というわけではなく、倫理的言動をするうえで必要となる正しい方法であるという意味において、倫理に通じるものがあると考えるのである。このような価値判断基準は、現代においても少しも衰えることなく、その倫理性を保っていると考える。

　仏教は元来、個人のさとりを促し、極楽浄土に往生するための修行を行うことを目的としていたが、同時に平等を主眼として国家や政治にも影響をもつ必要があった。仏教国家をつくり、理想的な政治を行い、国民が幸せな生活ができるようにすることが目的とされてきたと言える（注３）。

４．経典

　インドで生まれ発展した仏教は、中国、朝鮮半島を経由して日本に伝道されたが、その大元になるのが経典である。何千巻もある経典をすべて読むことは至難の技であるが、代表的な経典とその要約は一般人でも読むことが可能である。経典は一般的には大きく三つに分類される。

４．１経

経とは、釈迦の教えをまとめたものである。

４．２律

律とは、仏教徒の行動規範（いわゆる戒律）

４．３論

論とは、経や律を研究し、注釈をしたものである。

　また、経典の分類としては、小乗経典と大乗経典の２種類がある。

小乗経典は釈迦が直接弟子に説いた教えをまとめた原始仏教の経典であり『阿含経』がある。阿含経とは数千に及ぶ経典の総称であり、『長阿含経』『増一阿含経』などがある。

大乗教典は釈迦の教えを大衆に広めるための経典である。『般若心経』『法華経』『華厳経』などがあり、密教経典として『大日経』『金剛頂経』などがある。なお、般若心経は、大乗経典のエッセンスをまとめたもので、２６７文字で構成されている。仏教の神髄を伝えるものとして、よく知られている。あるがままに過去と未来を受け入れることで、こだわりを捨て、苦のないさとりの境地に至る道が示されている。

「法華経」（天台宗、日蓮宗が重んじる経典）の神髄といわれる如来寿量品第十六の中でも特に重要なのが「自我偈（じがげ）」である。「自我偈」は、縁起の法則を述べながらもこれを究極の真理とせず方便（手段）に過ぎないとし、釈迦の「久遠の成仏」を説いたものとされている。

「無量寿経」（浄土宗、浄土真宗、時宗が重んじる経典）においては、結願とか本願というのは、仏に対して自分が約束することであり、極楽往生を願う人には専ら念仏を唱える称名念仏が大切であると説かれている。

これらの経典は、現代の日本人にどのような影響を与えてきたのだろうか。まずは、因果応報の思想と六道の世界を巡るという輪廻転生の思想があげられる。また、仏教は、人生を苦ととらえて、苦からの脱却を説く。このような思想や苦からの脱却は、現代人においても多かれ少なかれ影響が残っているといえる。悪事を働けば地獄に落ちるとか、ご冥福を祈るとか、あの世に旅立ち苦から永遠に解放されるというのはその表れと思われる。

５．因果応報の思想

仏教の重要な教えの一つに因果応報の思想がある。簡単にいうとよい行いをすればよい来世を迎えることができ、悪い行いをすれば地獄に落ちるということである。そのような因果応報が生じるための前提は、死後の世界が存在することとその死後の世界を永遠に巡るという輪廻転生の存在である。現代日本人で、死後の世界があると信じている人は少ない為、この因果応報の思想は現代日本人にそぐわないものとなっている。しかし、悪行をすれば幸せな死に方をしないとか、悪行の報いがあるはずだとか、情けは人のためならずとか、よいことをすれば報われると信じている人は多く、この思想が脈々と日本人の心のうちに残っているといえよう。

６．輪廻転生の思想

　死後の世界は存在し、その世界は６つの世界（道）があるとされている。

はじめに、①天道：天上界にあり、苦がなく楽の多い世界である。

次に②人道：生、老、病、死、怨憎会苦（イヤな人と会う苦しみ）、愛別離苦（愛する人と別れる苦しみ）、求不得苦（求めても得られない苦しみ）、五取蘊（うん）苦（持てる者の苦しみ）の四苦八苦のある世界である。

次に③修羅道：怒りのままに争いを繰り返す世界である。

次に④畜生道：弱肉強食が繰り返され、互いに殺し合い、自分だけが生き残ろうとする世界である。

次に⑤餓鬼道：欲望の塊の世界である。

最後に⑥地獄道：あらゆる苦しみを受け、６つの世界の中で一番苦しみの多い世界である。

輪廻転生の思想では、生前の行いの善悪によりこれら６つの世界を永遠に巡るとされる。生前の行いが因となり、死後に行く世界が果として決まるというものである。この輪廻を脱却し、極楽浄土に往生するというのが、いわゆる「さとり」による往生なのである。仏教の教義は奥深く、上記のような単純なものではないが骨格はそのようなものである。

ここで重要なのは、このような因果応報と輪廻転生の思想が現代の日本人の倫理意識に影響を与えているのか、影響を与えている場合にはどのような影響をあたえているのかということである。この点について、言及された書物として、『文化史論―ベネディクト「菊と刀」を読む』（副田義也1993年p.288）がある。この中に、「仏教の影響力が日本の民衆に広く浸透したとはいいがたいが、その教義のうちの罪業観は最も徹底して受容された。仏教渡来以前の日本の固有信仰のなかにも霊魂の転移、すなわち生まれかわりの思想があり、これによって仏教の輪廻転生の教理は定着しやすかった。」「つまり、罪の報いを恐れることを教えたのである。これは、この世の悩み、苦しみは、前の生でのわが霊魂の罪業のせいであるという考え方になり日本人のあきらめのよさともなった」とあり、因果応報と輪廻転生の思想が受容されてきたことを示している。

また同書に、「鎌倉時代に入り、日本的仏教が形成されてはじめて日本人は霊性（宗教意識のこと）の生活にめざめる。」とあり、前世でどのような罪があって現世のこのような身分になったのか、あの世で助かることができるのかといった心配をするようになったことが取り上げられている。これなども因果応報、輪廻転生を信じてきた日本人の姿を示している。

仏教における輪廻転生の教理により、罪の報いを恐れる思想が日本人の心のうちに残っているといえる。親の因果が子に報いとか、前世の悪行が今の自分の不幸や罪の原因となっているとか、悪いことすると地獄に落ちるとかいわれることに代表されよう。そしてこれらの罪から逃れるために神仏を拝むという行為に日本人の倫理意識が出ているということができると考える。

７．まとめ

　以上、検討してきたように日本人の倫理意識の中には、仏教の教えが入り込んできており、意識しないうちに仏教倫理に適う言動をとるような行動パターンが出来上がっているのではないだろうか。無意識のうちに倫理的な行動をとってきているのである。

　この表れが、大地震発生時の給水を並んで秩序正しく受けたり、壊れた家屋の財貨を盗まないことや、拾得物を交番に届けたり、飲食後の片付けなどの行為に見られると考えられる。日本人の倫理意識の深層には、仏教の教えが潜んでいるといえるのではないか。これまで見てきたように現代においても、日本人の倫理意識に仏教倫理が強く生き残っており、コンプライアンス違反行為に対するブレーキ役を果たしていると考えられる。

注）

１．島園進「日本仏教の社会倫理」p.247～248。『末木（文美士）の仏教倫理の理解はやや極端なものだが、近代仏教学の原始仏教理解、また浄土教や禅の倫理の理解としてはそれほど変わったものではない。仏教からは世俗社会と積極的に関わるような倫理性は出てこないとするものだ。これに対して、大乗仏教で顕著となる慈悲の理念を仏教の倫理性の基盤にしようとする考え方もあるが、その意識を筋道立てて論ずる仏教学者は少ない。仏教の倫理性についての末木の理解は「超・倫理」というような理解しにくい概念を持ち出してくる新しさはあるが、実は仏教の倫理性を軽んじてきた近代仏教学の伝統に則ったものと言えるだろう。』『サンガは単に修行者のためにあるのではなく、社会に正法を行き渡らせ、平安な生活を導くという社会倫理的意義をもっている。』

２．島園進「日本仏教の社会倫理」p.55～56。『仏教の正法理念が政権にとってさほど重要な意義をもたなくなることと、サンガが統一体としての権威を維持できなくなることに関わりがある。平安時代末期の日本ではすでにそのような事態が生じており、だからこそ法然の断固たる宗派主義の宣言が強烈な衝撃をもたらしたのだ。そもそも浄土教が優位を占めることと政権が仏教に距離をとることは相関関係にある。法然は国家社会での「正法」の支配を目指す仏教から、国家社会はさておき、とにかく個人の極楽往生を目指す仏教への転換をラディカルに主張した。日本仏教史において、この転換がもった意味を「正法」理念に注目しつつ捉えなおす必要がある。』

３．島園進「日本仏教の社会倫理」p.69。『（仏教は）個人としての発心や悟りを促し、世俗生活の周縁での修行を行うことが信仰生活の中心であったのは確かだとしても、他方で仏教教団は国家や政治に影響力を及ぼそうとしていた。』

以上